

〈50周年記念号に寄せる〉 人文学研究所 50周年に寄せて

鈴木陽一

人文学研究所（以下習慣に倣い人文研という）が50周年を迎えるに当たり、長らく研究所及びそこに集う先達の学恩に浴したものとして、また一時期所長の任に当たったものとして、深い感謝の意とともに、若干の感想を述べることにする。

私が本学に赴任したのは82年32歳の時であった。松山商大（現松山大学）で3年の教員経験はあったものの、研究においても教育においても、掛け値無しの見習い状態であった。そうしたヒヨコに対しても、人文研に集う先生方は全く対等の立場でお付き合い下さり、時に厳しく批判され、時に優しく指導していただいた。まさにそれはサロンであって、学問的或いは政治的なディスカッション、エスプリの効いた雑談、腹を抱えるような馬鹿話が人文研で始まり、→研究室→飲み屋・寿司屋・レストランへ続いていった。そうした日がほぼ毎週あったし、時にはそれが一泊二泊の旅行にまで「発展」したこともある。その成果が人文研の特色である共同研究であり、その成果を学生に還元しようと生まれたのが総合講座（現在の共通テーマ科目の祖先、但し子孫は随分と「進化」したらしい）であった。吉本隆明、上野千鶴子といった方を招聘し、学生も教員も大いに啓発されるような講演を伺うことができたのも、日高先生が尽力された結果ではあるが、人文研のサロンが成し遂げた成果の一つである。この時の経験からすれば、神大の学生に知的好奇心がないとは言えないし、彼らの好奇心を喚起するためにはそれなりに資本（お金と手間と暇）が必要であることも明らかになったと思う。

90年代になると、先生方が少し忙しくなってきた、ややサロンのパワーが落ちてきた。その時に人文研を活性化させたのは、国際交流であったと思う。特に杭州大学との10年間の交流は、毎年シンポを開催し、その成果を学報の形式で出版するという形態で、当時の日本にあっては最先進であった。このシンポに外国語学部の様々な分野の先生方が参加されることにより、日中交流を軸に、アジアの近代化や東西比較文化、比較文明などの視点による新たな共同研究の種が蒔かれることになった。また、その際に築かれた日中間の人脈が、現在の神大の国際化の基礎となっていることも併せて強調しておきたい。

その後、21世紀になって杭州大学との交流が、同大学が浙江大学に合併されることにより、金庸氏を招いてのシンポという画期的なイベントを最後として、停止となった。また先生方が更に忙しくなり、人文研のサロンに集う機会が激減したこと、長い間人文研の活動を支えてきた事務体制が大きく変化したことにより、人文研の活動が曲がり角を迎えるに至った。その際所長の任にあったものとして、退潮気味であった人文研の活動に歯止めをかけ、再活性化することができなかったことについて、自らの力のなさをも含めて、今も残念に思っている。

願うらくは、今後の人文研が再びサロンとなり、先生方の個性と創造性を発揮できるような場にならんことを！